
"The story of Princess RYURA" © copyright Alina hosai 2005
「りゅら姫物語」 宝彩有菜 (01)

<一>

宇宙は揺れている。
エネルギーの波に揺れている。
満たされ、満たされ、すべてが揺れている。
それは、愛から生まれ、愛になり、愛を伝える、
すなわち宇宙の目的。
気付けば、おお、意識は光の速さで久遠を巡ろう。
愛のために、今ここで、今ここで。

りゅら姫は、お城に帰ってナビスダ王に報告しました。それを聞いても、王様は、
「古い前例もあるので、抵抗しても無駄だろう」
と防衛の為の何の準備もしませんでした。と言うか、本当にそのような事が起こるなんて、半分信じられなかったのです。

しかし、やがて満月の夜になり、とうとう本当に、りゅら姫を迎えるための乗り物が虹色の光に包まれながら、ナビスダ王城の中庭に、静かに静かに降りて来ました。宇宙船なのでしょうが、黒光りの箱に車輪が付いて、まるで牛車のような形をしています。

それが静かに降りて来るのを見守っている兵士達は、なぜか誰も身動き出来ません。

静かに音も無く降りて来た、その牛車型の宇宙船が、中庭の白い砂の上にふんわりと、着陸しました。

扉が開き、中から、きっちりタキシードのような黒い服を着て、御者のような帽子をかぶった者が、一人降りてきました。

「私はチャンポーと言います。りゅら姫殿をお迎えに参りました。クンクン」

と白い手袋の弛んだ指の間を左右交代にキュッキュッと詰めながら、胸を張って辺りを見回しています。

満月の光で青白く輝いている砂地の上に、牛車型宇宙船とチャンポーとか言う御者らしき者の影が、くっきりと落ちています。でも、よく見ると牛車もチャンポーという御者も、その影の上、五センチくらいの所に、宙に浮いているように見えます。ちょうど透明な空気のマットレスを延べた上に乗っているような感じです。

りゅら姫は、いよいよ最後に両親にお別れのキスをして、御者の前までしずしずと進みました。チャンポーが白い手袋をした手で船内から漆塗りのような小さな箱型の踏み台を取り出して、りゅら姫の足許に降ろしました。りゅら姫は、チャンポーに向かって、

「行くことは行きますが、アンダルピアとかを探し出したら帰して貰えるのですか」

と聞きました。りゅら姫がチャンポーに近づいてよく見ると、チャンポーは鼻の先だけ、丸くて黒く濡れたようになっていました。犬の鼻を着けたような感じです。

「えー、私は、使いの者でして、詳しい事は知りませんが、帰るチャンスは二度あります。

一度は道場を卒業して一人前になった時です。クンクン。

もう一度は私も知りません。何かを修行した時です。あるいは修行しなかった時だけな。忘れちゃったなあ。

りゅら姫のおっしゃっているアンダルピアの事は、私は全然知りません」

「あの一、帰ってくるまで、何年も掛かるのですか」

「宇宙では時間が曲がっていますから、この現在に戻ることも可能です」

「よく理解できませんが・・・」

「すいません、私も上手く説明できませんが」

「では、父や母には、すぐ戻って来ると言っても差し支えないのですか？」

「そうですね、クンクン、それでいいと思います」

りゅら姫は、りゅら姫の後から恐る恐る牛車の方へ後から歩み寄ってきた両親に、そのように伝えました。

父親は分かったのか、分かった振りをしたのか、知りませんが「うんうん」と一応、頷きました。

でも、母親はずーっと涙が止まらぬまま、

「りゅら姫や、この水晶のペンダントを持って行きなさい、グスン、グスン」

と水晶のペンダントを、りゅら姫の首に掛けました。

チャンポーは、それをチラッと見ましたが、何も言いませんでした。

りゅら姫が乗り込むと、その宇宙船は、音も無くあっという間に夜空に舞い上がりました。そして、見る間に小さくなってスーッと星と星の間の闇の中に消えてしまいました。

ナビスタ王をはじめ、その光景を見守っていた人々は、ふっと我に返りました。そして、今見た不思議な光景は本当にあった事なのだろうか、まるで夢を見ていたような気持ちになりました。

牛車型の宇宙船に乗り込んだりゅら姫は、それが夜空に吸い込まれるように上昇し始めると、すぐに気を失って、船内の床に倒れてしまいました。たぶん幾千里の時空を、大変なスピードで越えて行くため、意識が保てなくなったのでしょう。

それから、どれくらい時間が経ったのか分かりませんが、チャンポー御者に起こされるまで、りゅら姫はずっと宇宙船の中で眠っていました。

「りゅら姫殿、着きました。起きてください。クンクン」

と言うチャンポー御者の言葉で、りゅら姫はやっと目を覚ましました。

「えっ、もう着いたのですか。一体ここはどこなのですか」

と起きあがって辺りを見回しました。もう、宇宙船は、どこか森のような所に着陸しています。

「ここは、ハレマーラ系の惑星のひとつでミタケントスと言います」

りゅら姫が、牛車型宇宙船の窓のすだれを上げて、急いで外を見ると、そこはナビスタ王国のお城の郊外にある、美しいシンシンの森の中にとっても良く似ていました。

「チャンポーさん、ここはナビスタ王国のシンシンの森ではないのですか」

「いいえ、ここは、ミタケントスの緑髪のおばばの森です」

「ミタケントス？ でも、シンシンの森そっくりですね」

「宇宙にはそっくりな星が必ず六十四個あります。」

そっくりと言っても次元毎に鏡に写ったように対称ですから、厳密にはそっくり同じと言う訳ではありませんが……。

そっくり同じではなくて、まあ、少し似てるかなと言う星なら数え切れません。

それこそ無数にあります」

「へーえ。で、このミタケントスは地球と対称の星なのですか」

「知りません」

チャンポーは親切なのか、不親切なのか、さっぱり分かりません。

「チャンポーさん、私は、緑髪のおばばの道場に呼ばれているのですが、ここがそうですか」

「ええ、このミタケントスです」

「で、道場はどこにあるのですか」

「真っ直ぐ東です」

「西に行くのかと思いましたが、本当に東ですか」
「形の有る物は西に、形の無い物は東に、求めて行くのが、ここの常識です。ですから、りゅら姫は、まっすぐ東に向かってください」
「それでは、緑髪のおばばの道場は、形が無いのですか」
「いいえ。形が無いものとは、光、エネルギー、意識、こころ、愛、そんなものです」
「ああ、なるほど。でも、どうして、道場まで連れて行ってくれないのですか」
「次の指令が入ったのです。大丈夫です。クンクン。ちゃんとたどり着けます。もう、すぐそこですから。たぶん七日もあれば」
「ええーっ、七日もかかるのですか」
「そこに、非常食と寝袋セットの入ったリュックがありますから、それを肩に担いで宇宙船から降りて下さい。リュックのポケットにはコンパスとアーミーナイフ、コップ付きの水筒などが入っています。服は、そうですね・・・」
とチャンポーは、りゅら姫の服を改めてざっと目でなどって、
「はい、そうですね。今着てらっしゃる服で充分ですね」
とそっけ無く言い切りました。
りゅら姫が着ているのは、白い修道服です。出発前にシンシンの森の奥寺のビルバルジー老僧侶から貰ったものです。修験者が山歩きの行の時に着用する衣装です。
そう言えば、ビルバルジー老僧侶は『わしも付いて行きたいもんじゃの一』とため息をつきながら、『りゅら姫が帰ってくるまで、生きてはおられんかも知れんなあ』と寂しそうでした。

チャンポーが、せき立てるように、
「とにかく、クンクン、まっすぐ東に進んでください。地図も一応ありますが、要らないでしょ？」
「いえ、要ります。(冗談じゃないわ、地図も無しでどうするのよ) それを下さい」
とりゅら姫はリュックを背負いながら、急いで、折り畳みである地図を引ったくるように受け取りました。
「でも、チャンポーさん、私をちゃんと道場の正門まで連れて行かないといけないんじゃないんですか。後で怒られませんか」
「大丈夫です。これも指令ですから」
「緑髪のおばばからの指令ですか」
「まあ、そうです」
何だか大変な事になってきました。一人で森の中なんて。家族でピクニックに行ったことはありますが、たった一人で森の中を何日も行進するなんて、しかも、うら若い娘が、信じられません。なんて事になってしまったのでしょうか。でも、ひょっとすると、これでもう修行が始まっているのかも知れません。
「これも、修行の一つですか」
「いえ、単に手違いです」
「ええーっ、なんていい加減な」
「いい加減ではありません」
「あなたは悪いとは思わないのですか」
「私は悪くありません。それより早く下りて下さい。次がありますので」
しかし、こうなってしまっただけは仕方ありません。言われた通り、りゅら姫はリュックや水筒を持たされて、船を降りました。振り向く間も無く、チャンポーはドアを閉め、あっという間にビューンと斜めに空を上昇して、眩しい青空の彼方に小さく消えてしまいました。

りゅら姫は、深呼吸を一つして、リュックを担ぎ直し、指さされた東の方向に歩き始めました。

『あのチャンポーめ、くそっ、いつかきっと仕返しをしてやらねば・・・』

と歩いていると、ますます故郷のシンシンの森のような気がしてきます。見覚えのあるような、清らかな小川や、大きな榎の木にも出会いました。もしかすると中央の丘の上に登れば、ナビスダ王国の白巫のお城が望まれるかも知れません。

しばらく進んで行くと、大木が倒れて横倒しになっていました。その上に草が生えています。りゅら姫は、その大木に腰掛けて、

「そうそう、地図があったんだ」

と貰った地図を取り出して広げってみました。

表紙には「ミタケントスの地図」と権威の有りそうな字で書いてあります。その四つ折りの紙を、おもむろに開いてみると、

「げーっ、何よ、これ、白紙だわ、白紙、印刷漏れかしら」

とりゅら姫はびっくりしてしまいました。

「超、超、運が悪いわ。他の地図にすればよかった。ああ、あの時、開いて確かめればよかったのに、チャンポーが、早く降りろ、早く降りろと、せき立てるからこんな事になってしまった。許さん、道場に着いたら事務局かどこかに絶対に訴えてやる。まったく。

しかし、さい先が悪いなあ。地図が白紙なんて、何だか、とっても、とっても、良くない予感がするなあ」

とぶつぶつ言いながら、何も書いてない地図から目を上げて、ぐるりとまわりを見渡せば、やはり、どうしてもシンシンの森のような気がします。なんだか狐に摘まれたような気がしてきました。

どうして、ここがミタケントスとか言う星なのでしょう。御者のチャンポーの指さした東の方向は、シンシンの森ではビルバルジー老僧侶のお寺のある方向と同じですから、そこまで行けば老僧侶が白い長い髭を撫でながら、『やあ、やあ、りゅら姫、よく来た、よく来た』とニコニコしながら出迎えてくれるかも知れません。

そんな事を考えながら、また歩いているうちに、陽もだんだん傾いて来て、りゅら姫は本当に心細くなってきました。

家でお母さんは、今ごろ何を思って夕飯の支度をしているのでしょうか。りゅら姫は泣きたい気持ちになってきました。

しかし、それより、何より、森が真っ暗になる前に、夜露を防げるような場所を探さなくてははいけません。どんな動物がいるかも知れないし、寝袋はあると言っても夜は寒いかも知れません。足元は暗くなるし、りゅら姫はどんどん不安になってきました。

しばらく歩いて行くと、前方にひときわ大きな榎の木が、夕暮れの空に豊かな枝を張って黒々と立っています。

近づくと大きな幹に、祠（ほこら）があります。この祠の中なら、今夜のねぐらにちょうど良いかも知れません。りゅら姫は、その中で一晩明かす方が良さそうだと思います。

りゅら姫が、大きく盛り上がった榎の根に足を掛けて、恐る恐る、祠の中を覗き込むと、先ほどまで誰か居たのでしょうか、気持ち良さそうな乾いた藁が綺麗にふんわりと敷き詰めてありました。

「誰か居るのかしら、もしもーし。

返事が無いわねえ。誰も居ないのかしら。

周りはこんなに暗くなってしまっ、もう一歩も歩けないし、今日はここに泊めて貰いましょう」

りゅら姫は、よっこらっしょと、榎の木の祠に入りました。中は思ったより広くて、立ったままでも頭が天井につきません。これなら手足を伸ばして充分寝れそうです。それに乾燥した草が十分に敷き詰めてありますから、ふわふわしてとてもいい気持ちです。

肩から掛けていた水筒やリュックをその辺りに降ろし、りゅら姫は、ふわふわの藁の上に、

『あー、疲れたっ』

と言いながら背中からどーンと後ろに倒れました。スプリングの良いベットにどーンと倒れるような、いつもりゅら姫が自分のベットでやっているような感じです。

「うぎゃー」

おしりの下から悲鳴がします。

「あらー。ごめ・・・」

とりゅら姫は『ごめんなさい』と言おうとしましたが、しかし、相手が何者か分からないので、りゅら姫は、状況把握の為に、そのまま身動きしないでじっとしていました。すると、りゅら姫の身体の下から、

「むぐっ、むぐっ、うう、助けてっ、むぐっ、潰れてしまうっ」

と苦しそうな声がします。

りゅら姫は、

『ほほー、しめしめ、これは勝てそうな相手だわい』

と思いましたが、今しばらく様子を見ることにして、黙ってそのまま押しつけるように、じっとしていました。

「うううっ、もうだめだっ、重たい、何でも言う事を聞くから、ううう、助けてくれー」

りゅら姫は、どうしようかと、ちょっと考えて、

「ん、それでは、だなあ、私の家来になるか？」

と威張って言いました。

「・・・・・・・・」

返事がありません。

「おい、助けてやるが、私の家来になるか？」

「嫌だ」

「ほー、じゃあ、このまま退かない」

とりゅら姫は座り直して、お尻を少し左右にぐりぐりと押しつけました。

「うぎゃー、やめてくれっ。うぐぐぐっ潰れるっ」

「家来に成るなら、止めてやる」

「嫌だ」

「じゃあ、もっとぐりぐりする」

とりゅら姫は、今度は腕を上げて、お尻をもっと強く左右にぐりぐりと押しつけました。

「ほら、ぐりぐり、ぐりぐり」

「うぎゃー、やめてくれっ。うぐぐぐっしっ死ぬっ」

「家来に成るなら止めてやる。ぐりぐり」

「成る、うう成る成る、ちえっ、ちえっ」

「そうか家来に成るか、で、名前は何と言う？」

「ムサビー。成ると言ったんだからー、うう早く下りてくれ」

「よしよし。ムサビーか」

りゅら姫はごろんと横にころげて、お尻の下のムサビーを解放してやりました。藁の中から、ムサビーが、顔にひついた藁を取りながら出て来ました。

りゅら姫はムサビーの姿を薄暗がりの中で初めて見ました。

ムサビーは、身体の毛に付いた藁を、両手でパンパンと払いながら、藁の中から、よっこらっしょと起き上がりました。

『まあ、かわいい』

とりゅら姫は、茶色のぬいぐるみのようなムサビーを見て思いましたが、そう言うと親

分らしくないので、

「私は、りゅら姫である。ここはムサビーのすみかであるか」

と子分にしたばかりのムサビーに聞きました。

ムサビーの話によると、ムサビーはバリオン星からやって来たのですが、緑髪のおばばの所に行くのが恐くて、しばらく、ここで様子を見ているのだそうです。

「緑髪のおばばって、恐いのか、ムサビー」

「怖いじゃないですか。緑髪ですよ。それにおばばですからね。二つ合わせて緑髪のおばばでしょ。当然怖いですよ」

「で、会った事はあるのか」

「ありませーん」

「会わなきゃ、恐いかどうか分かんないじゃないか」

「むむむむ」

「ははーん。ムサビーは怠け者なんだな」

「違いますよ。ナマケモノじゃなくて、ムササビの系列です」

「じゃ、ムサビーは空も飛べるのか」

「もちろん。えへん、夜でも飛べますよ」

「じゃ、緑髪のおばばの道場を偵察して、それで恐いと分かったのか」

「うんにゃ」

と首を横に振っています。

「道場の上を飛んだことは」

「無いです」

「どうして？」

「だって、怖いじゃないですか。撃ち落とされるかも知れない」

「うーん」

とりゅら姫はうなっていました。とんでもなく弱い奴を家来にしたのかも知れませんが。

でも、旅は道連れ世は情け、知らない所で可愛い話し相手が出来てりゅら姫は嬉しく思いました。